

福祉教育

実践ガイド



ほらっちくん

もっとわくわく！
もっとドキドキ！



もくじ

- わくわく・ドキドキの学びをはじめよう！！ 2
- 事例紹介 わくわく・ドキドキの福祉教育
 - ① 櫻ヶ岡中学校 3
 - ② 相森中学校 7
 - ③ 辰野中学校 8
 - ④ 保科小学校 10
 - ⑤ 長野日本大学学園 長野小学校 12
 - ⑥ 長野清泉女学院高等学校 14
 - ⑦ 長野県北部高等学校 16
 - ⑧ 埴生小学校 ⑨ 箕輪西小学校 18

- ⑩ 南木曾小学校 ⑪ 須坂小学校 19
- ⑫ 鉢盛中学校 ⑬ 櫻ヶ岡中学校 20
- ⑭ 依田窪南部中学校 ⑮ 堀金中学校 21
- 「福祉教育のつどい」開催レポート 22

楽しくなくちゃウソ！の福祉教育は、たとえばこんな授業です。
車椅子で遊ぼう！ 視覚障害がある方と、すいとんを作ろう！
生まれてくるってどんな感じ？ 遊びから考えるコミュニケーション
ゲームで楽しくコミュニケーション

- 長野県の社会福祉協議会・ボランティアセンター一覧



わくわく・ドキドキの 学びをはじめよう！！

わくわくするのは、知らなかったことに挑戦できる時です。
車いすに乗ったら、どんな気持ちになるの？どんなことができるの？
障害のあるこの人は、どんな人なの？どんなふうに毎日を過ごしているの？
私たちの暮らしているまちには、もっと面白いものがあるんじゃない？
ドキドキするのは、新しいものに出会った時。
初めての人と、何を話したらいいんだろう。何て話しかけたらいいんだろう。
ちょっと怖いような気もする。
福祉教育は、わくわく・ドキドキする学びになっていますか？

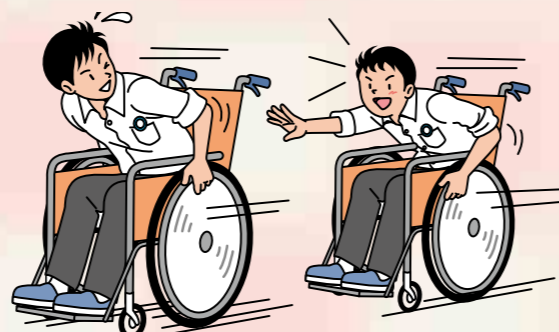


視覚障害のある講師が言いました。「どこの学校でも聞かれるのは『困ったことはありますか』ばかり。どうやって色を知るの？トイレはどうしているの？ そんな小さなことをどんどん聞いてほしい。それが私たちが理解することの始まりなんだから」。

ある先生が言いました。「今の子どもたちはあまり困ったことがない。けれど地域に出て行くと知らないことだらけ。いろいろな人に助けを求めよう。『困る』ということを知る。『困る』を知ることは福祉の第一歩なんです」。

車いすに乗った講師が言いました。「福祉教育って、楽しくなくっちゃウソでしょ？記憶に残るのは、車いすに乗ったあいつと遊んだの、楽しかったなということのはず。」

車いすの人と「車いすレース」をして遊んだっていい、知らない人に話しかける最初の言葉を探して困ったっていい、障害のある人にトイレのことを聞いたっていい！今日の前にいる人に、勇気を出してぶつかろう。わくわく・ドキドキは、そこで初めて感じられるものです。



疑似的な体験では、物事の「ある面」については学べます。けれど、人は様々な面を持っていて、それぞれ違う個性を持っています。いろいろな人がいて違いがあるから、出会うと楽しいし、一緒に新しいことができる。そう教えてくれるのは、「その人自身と出会う」という、「本物の体験」です。

本物の体験が持つわくわく・ドキドキの後には、最高の発見があります。勇気を出してぶつかった自分自身と、それに応えてくれる人のすばさを知り、違いを超えて人と人がつながる楽しさを感じることが出来ます。その繰り返しの中で、自分たちが変わっていくことを感じることが出来ます。

福祉の学びは、こうした発見をする、楽しい経験です。その記憶は、その人自身のものとして、その心と身体に、確かに蓄積されていきます。

*この「実践ガイド」は、平成24年度に開催した「福祉教育実践研究会」「福祉教育のつどい」の報告などをもとに再構成したものです。



ほらんちゃん



長野市立 櫻ヶ岡中学校

わくわく
ドキドキの
福祉教育

事例紹介 1 長野市立櫻ヶ岡中学校



「ふるさとサクラといえは…」 地域を足場にした体験学習



「私にとってのふるさとサクラを見つけよう!!」
3学年 総合的な学習の実践から



「ふるさとづくり」の授業で、おずおずと地域に踏み出した中学生。顔をあげたら、そこには助けてくれる人がたくさんいました。地域の人々の力を借りて、活動はどんどん広がっていきました。

知ろう、見つけよう、 私たちの地域を!

長野市立櫻ヶ岡中学校では、総合的な学習の時間で「地域を足場にした学習」を行ってきました。校舎の改築のために切られてしまう桜の木を地域の人たちにも覚えてほしい、と「さくらプロジェクト」に取り組んだほか(p.20)、地域の方々に協力していただいて「働くて何?」というのを考える職場体験学習なども行ってきました。

「さくらプロジェクト」に取り組んだ2年生が3年生になる時、先生方は気づきました。地域の皆さんに学んできたけれど、生徒たちは、地域にそれほど愛着を持っていないのではないか、と。中学校を卒業すると、ますます地域との関係が薄くなってしまふ。ここはかけがえのない「ふるさと」だということを意識し、自ら「地域を知りたい、地域のために何かしたい」と思っています。

そんな先生方の願いから、3年生の総

合的な学習では、「知ろう 私たちの住む地域 見つけよう 私たちのふるさと」というテーマで活動をしていくことになりました。

まちに出て、いろいろな人に 会うことで見えてきたもの

「ふるさとサクラといえは、何?」……みんなで出し合ったものをもとにテーマ別のグループを作りました。こうして「創ろう・造ろう 私にとってのふるさとサクラ～地域に発信! サクラ〇〇プロジェクト」(〇〇には、次ページで紹介する6つのテーマが入ります)がスタートしました。

具体的にどんな活動をしたらいいかを話し合い、工夫して進めていきました。普段なかなか会えない人、行けない場所へも、勇気を出してアタックします。最初は誰に話を聞けばいいのかさえ分からないグループもありました。しかし、まちに出ていろいろなものを見て、人に会ううちに、課題や宝物、次の活動の糸口が見えてきました。中学生だからこそ

できる関わり方もあれば、大人の社会の現実に触れることもありました。

小さな子どもたちからお年寄りまで、いろいろな人に出会い、たくさんのことを教えてもらったり、挨拶してもらえようになつたりしました。人と話すときに、勇気を出して声をかけること、どうしたら伝わるのか工夫することも学びました。

この学習は、3年生の総合的な学習の時間の半分以上にあたる約40時間をかけて行う、大プロジェクトとなりました。

地域の結びつきを感じて

「私たちのふるさとサクラ」。そう意識して、地域に視線を向けたら、たくさんの方が応え、助けてくれました。「それまでは、地域は自分に関係ないと思っていたけれど、この活動を通して地域との結びつきを強く感じた。これからは積極的に関わっていきたい」。一人の男子生徒が、卒業前にたくさんの人たちの前でそう発表しました。活動を通して、大きく成長したのです。

「創ろう・造ろう 私にとってのふるさとサクラ ～地域に発信！ サクラ〇〇プロジェクト」

〇〇には
こんなテーマが
入ります

1.七瀬通り商店街

商店街を活性化させ、元気なまちに！
●夏祭りの参加、手伝い
●企画会議へ参加 ●商店街の人と交流
●スタンプラリーの企画実行
●七瀬通り商店街のPR

昔ながらの商店街です。



まちのプロモーションビデオも作っちゃった！



夏祭りには金魚すくいだよ！

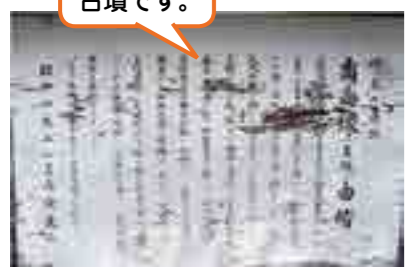


スタンプを集めたらお土産があるよ！

淋しくなってきた商店街を盛り上げたい！楽しい企画をたくさん考えました。



信大生とコラボ！



謎の多い古墳です。



南向台古墳のお掃除…地元の住民自治協議会のホームページでも紹介しました。

2.東口開発*

長野駅の東口開発を知り、より良いまちづくりを！
●今後の開発について ●区画整理、住民意識
●開発前と開発後の変化 ●東口の公園開発
●開発の内容を知ってもらう
*平成5年度から続く長野駅周辺の土地区画整理事業



開発？それとも区画整理？

立場が違くと、このまちの見え方も違うんだね。

私達のふるさとサクラには
こんなにたくさんの
人・もの・場所がありました。

4.レキシセツ(歴史・施設)

●放送局で櫻ヶ岡中学校をPR
●信州大学YOU遊フェスティバル企画・参加
●善光寺を世界遺産に
●長野駅周辺の見どころをテーマにタウン誌作成
●新しい市民会館のPR 市民ワークショップに参加
●南向塚古墳の調査、宣伝

地元テレビ局の情報番組に出演させてもらい、学校のPRをしました。



この桜の木も今はありません。

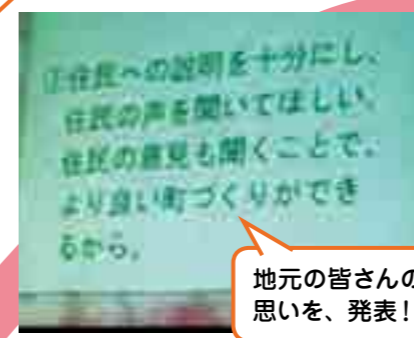
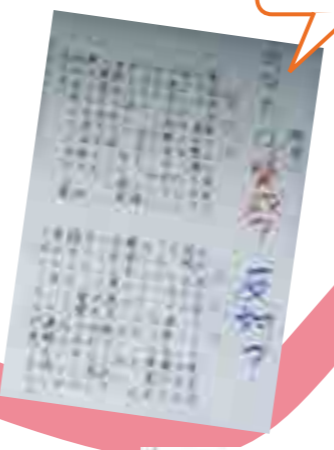
5.地域環境

みんなが住みやすい地域に！
●地域ごみ拾い、ごみ調査
●地域を花でいっぱい
●桜の押し花作成
●桜の木を使って記念品の制作
●地域のバリアフリー調査



おうちゅう 櫻中のシンボルでもある桜で押し花の葉を作りました。

いろんな意見があるんだなあ。まちづくりも難しいんだ。



地元の皆さんの思いを、発表！

地域環境チームのみんな～！花壇作るの手伝って！！



よーし、一緒にやろう！立派な花壇にするぞー。

高齢者の方にいろいろなことを教えてもらいました。

お年寄り・子ども=福祉⇒ボランティアセンター！…と思ったら



手をつないで一緒に遊ぼう！

歓迎してくれた！うれしいなー！

3.お年寄り、子ども

お年寄り・子どもを含め、みんなが住みやすいまちに！
●高齢者施設の訪問 歌、話、手伝い、など
●お年寄りに昔の遊びや料理を教えてもらう
●三世代交流

ボランティア「される」だけじゃないですよ！ここには元気なお年寄りがいっぱい来てます！



6.特産品

地域の特産品をPR！
●七味を使った料理
●七味缶のイラスト
●イメージキャラクター作成
●おやきの調理、開発、PR
●りんごを使った料理、開発、PR

長野のお土産といえば七味唐辛子…「八幡屋磯五郎」の工場長さんに会いに行きました。

会社のしくみや商品づくりのコストのことなど初めて知った！



オリジナルキャラクター「唐辛七味の助」。缶のパッケージデザインに提案させていただきました。

いろんな事情で製品化できなかったけど…



わくわくドキドキの福祉教育

須坂市立 相森中学校



東日本大震災で被災した豊間中学校との笑顔の交流



豊間から記念の旗、相森からは双子のモザイクアートを交換。

被災地を訪ねた先生の報告で、校舎がなくても仲間とともにがんばっている豊間中学校の生徒たちを知り、「自分たちができる支援を」と、様々な活動を行う相森中学校。2012年夏、親善交流使節団を結成し、生徒たちの訪問がかないました。



グループに分かれ、ゲームやトークで楽しい交流時間を過ごしました。

る団結の強さ、心の優しさが伝わってきて、私たちが元気をもらった気がします。震災を忘れないためにも、この交流を通して学んだことをみんなにも伝え、今後どのようなことができるか考えていきたいと思っています。

●引率した月岡英明先生より
被災地支援のあり方は多様ですが、笑顔や友情を届け、絆を深める交流の有効性を今回強く感じました。「支援する」と言うより、「手をつなぎ、被災地から学ぶ」というスタンスが大事です。お互いの生徒たちがこれからの復興の力となる日が来ることを願ってやみません。



あの震災を忘れずに…… 私たちが元気をもらいました

須坂市立相森中学校では、2011年の東日本大震災で被害を受けた福島県いわき市立豊間中学校に応援ビデオレターを送るなどの交流活動を続けてきました。私たちは「今年も何かできないか」と考え、先生やPTAの方々の協力で、8月に親善交流使節団を結成して被災地を訪問し、豊間の方々に会いしてきました。

緊張する私たちを笑顔で温かく迎えてくださった豊間中学校の皆さんとは楽しく交流ができ、みんなで困難を乗り越えようとしてい



被災現場を視察……ショックでした



親善交流使節団に参加した生徒の感想より

- 現地に行ってみなければ、被害の実態や被災者の思いを本当に肌で感じ、理解することは難しいんだと学びました。
- みなさん笑顔で迎えてくれたけれど、自分が思っていた以上に悲しい思いを抱えていることが分かりました。
- 被災現場は残酷の一言。被害の規模が想像以上に大きすぎて言葉が出なかった。



いまだ放置されたままの震災がれき

- 豊間の人たちが辛い経験を乗り越えてくることができたのは、仲間との絆があったからだと思いました。
- 被災地の人々が今最も怖いのは「忘れられること」だそうです。このつながりを大切に、自分が見て聴いて感じたことを多くの人に伝えていきたい。大震災はまだ終わっていないのです。

「ふるさとサクラといえば…」地域を足場にした総合学習

わくわくドキドキの福祉教育

*平成25年2月2日「福祉教育のつどい」事例発表より

総合的な学習の時間◎テーマ

地域を足場に自立していく生徒を育む総合的な学習

「地域を足場に」とは……

- ①地域に学習素材を見つけ、地域とのかかわりの中で学習を深めていく。
- ②地域から見いだした課題をもとに、視野を社会全体や世界に広げていく。
- ③社会にある問題等から課題を見だし、地域に戻って学習を深めていく。

地域を足場にすることで、より体験的であり、実感を伴った学習が展開できる。

→福祉教育とのつながりが生まれた

●櫻ヶ岡中学校 小松保裕先生より

活動を通して、地域の方の温かさ、支えを感じることができました。生徒たちが何かしようとする、それに応えてくださる方が地域にはいました。何でもやってみよう、やってみれば何とかなる、という経験をして、大きな自信になったと思います。ある生徒が言いました。「私が地域のことを気にするようになったら、地域の方が私に寄ってきてくれるようになった。顔を上げれば相手と目が合う。目が合えば挨拶をして関係が始まる。私もそのことを、生徒たちから教わりました。」

生徒たちもたくさんの人たちと出会ったし、地域の人たちを生徒たちがつなぐ場面もたくさんありました。私自身も、生徒たちのおかげでいろいろな人とつながることができました。地域に出会う、つながる、そして笑顔が生まれる、そういう福祉教育だったと感じています。



2学年 前期

「働くってどういうこと？」

～ふるさとサクラに働く人々の生き方に学ぼう～

大まかな学習の流れ

- *「働くうえで大切なこと」検討会
ビデオを見たり、自分で予想したりして意見を出し合う
- *「ふるさとサクラに働く方のお話を聞こう」
まちの人たちから働くことや商店会などについて、話していただく
- *ふるさとサクラ探検隊
学年で分担し、グループごとに職場訪問インタビュー
- *職場体験学習
(職場決定・事前打ち合わせ・当日・お礼状書き等)
個人テーマを決定し、テーマに沿って体験・インタビュー
- *「働くってどういうこと？」私の結論!!
振り返りマップをかき、学年討論会で互いの意見を交換

2学年 後期

「知ろう 私たちの住む地域 見つけよう 私たちのふるさと」

大まかな学習の流れ

- *「ふるさとサクラといえば○○」
○○に入るものを考え、学年集会で紹介しあう。知っていること、もっと知りたいことを付箋に書き、ボードに貼る。
- *「ふるさとサクラ調べ隊」
自分が調べたいことを決め、グループで検討しながら実際に地域に出て調べる。討論会で調べたことを紹介する。
- *ふるさとサクラ調べ隊で学んだこと
調べる中で知ったことや生まれた思いをもとに、これから自分ができることやしたいことを考え、紹介し合う。



3学年

「創ろう・造ろう私にとってのふるさとサクラ ～地域に発信!! サクラ○○プロジェクト～」

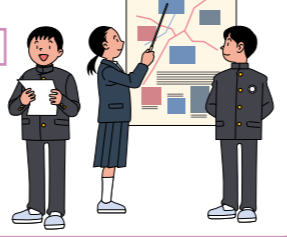
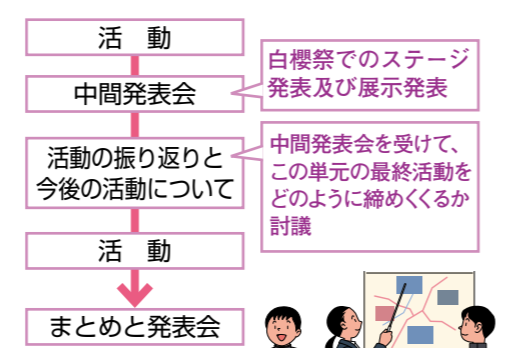
これまで(2学年)の実践を踏まえ……

生徒のふるさとサクラに対する思いの高まりを大切にしつつ、地域に対して自分ができることを探り、実行することで、地域への所属意識を高め、自立できる生徒になってほしい。



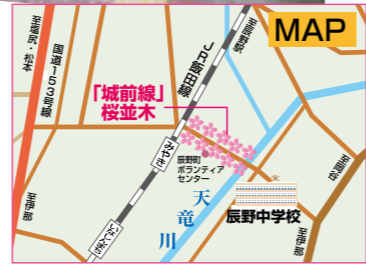
生徒が「わたしにとってのふるさととはここにある」という思いをもって中学校での学習を終えられるように願って。

大まかな学習の流れ



辰野町立 辰野中学校

町道の「桜トンネル」を守ろう！ 50年続く自慢の伝統活動



ホテルの里として知られる上伊那郡辰野町。まちなかにある城前橋からJR飯田線宮木駅までの町道は美しい桜並木の一本道です。辰野中学校では、50年間にわたって、この桜の美化活動に取り組んできました。桜並木の周りには、地域の人々のいろいろな思いがあります。みんなの思いが引き継がれ、つながりながら、まちは育っていきます。

辰野中学校と「城前の桜」

辰野町立辰野中学校に近い辰野町城前橋から、最寄りのJR飯田線宮木駅までの一本道「辰野町道1号線（通称：城前線）」は、美しい桜のトンネルです。

この並木道の桜は、昭和35年(1960年)に母国に帰国した北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)の方々が、辰野町に暮らした思い出に、と植樹していったといういわれのあるものです。

この沿線の清掃と緑化活動には、早くから辰野中学校の生徒たちが関わっていました。苗木を買って植樹し、草取りをし、季節になると花びらや落ち葉の掃除をしてきました。50年も続く、辰野中学校自慢の地域活動です。

一人の女子生徒の思いから

この活動が始められ、そして続けてきた背景には、この特別な桜に対する思

いがありました。

活動を始めたのは昭和37年(1962年)、当時の辰野中学校3年生の女子生徒。生徒会活動の帰りに、偶然この桜のいわれを知りました。当時の桜は瀕死の状態。そこで、彼女は「自分にできることをしよう」と、友人と草取りを始めます。彼女の思いと行動は後輩たちに引き継がれ、緑化委員会、そして生徒会の活動へと広がって行きました。

今では老木になり、元気がなくなってきた、並木道の桜。沿線の住民の方からは「確かに花はきれいだけど、いい時ばかりではない。最近は大きな枝が落ちて危険。そろそろ伐採してはどうだ」という声も挙がってきました。

平成22年(2010年)に、沿線にある辰野町ボランティアセンターを中心に、桜の手入れを地域の人々で考える「城前の桜 長寿化プロジェクト」が始まりました。

城前の桜 長寿化プロジェクト

プロジェクトでは、桜についての勉強会、苔落としなどの作業をしています。また、平成24年(2012年)1月に開催された「協働のまちづくりを進めるボランティア懇談会」(辰野町ボランティアセンター主催)では、地域の人々が桜について話し合いました。辰野中学校もこのプロジェクトや会議に参加し、地域の方々と出会い、話し合う機会を持ちました。

中学生が育ててきた並木道は、今ではまちのシンボルとして人々に愛され、また、いろいろな思いの出会う場になりました。桜を通して、沿線の空き家の増加や高齢化の現実など、地域の抱える課題にも気づかされます。

活動を継続し、また地域に広げていくためにどうしたらいいか、辰野中学校の皆さんは今も考え続けています。

辰野町「城前線」桜並木の物語

このまちを思う北朝鮮の方の気持ちがこもった大切な桜だったんです。



1960年 朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)の人たちが母国に帰国の際、記念として城前線に桜の木を植える。

1962 辰野中学校3年生の女子生徒が、友達と2人で桜の草取りを始める

1963 辰中生みんなて桜を育てようと呼びかけ

1964 辰中生徒会に緑化委員会が発足

1965 桜並木の掃除は辰中の伝統的活動に！

その後…桜並木は大きく育って、見事な桜のトンネルになりました。

1970 町の整備が行われ、桜並木は見慣れた風景となり、桜並木のいわれも次第に忘れられてしまいました。

やがて、桜並木も老木化が進み……

2010～ 「城前の桜 長寿化プロジェクト」始動

いろいろな立場の、いろいろな思いがある。だからみんなで、桜のことを話し合おう！

「協働のまちづくりをすすめるボランティア懇談会」開催

地域の人と一緒に取り組んでいます。



幹や枝の苔落とし

桜の木のカルテ作り



桜がもっと元気になるようにしたい。

桜並木はまちのみんなのもの みんなで協力したら みんなが喜ぶ、桜も喜ぶ！

●辰野中学校生徒会顧問の山本訓子先生より

「先輩から引き継いだ活動だから続けていく」というだけで取り組むのではなく、「なぜこの活動が大切なのか」ということを全校が理解した上で、新しいアイデアを加えながら生徒会として取り組んでいけるようなサポートが顧問としては大切だとあらためて感じました。

今年度、ボランティアセンターの方々に入ってもらって、様々な活動を地域の方と一緒にさせていただいたことで、生徒達は地域の方々の願いや先輩方の願いを受け継ぎ、これまで以上に桜並木を大切にしていきたいという気持ちを強く持って積極的に活動に取り組んできました。生徒達には卒業後も気持ちを大切に持ち続けてほしいと思います。

今後も地域の皆さんと一緒に大切な桜並木を育ててほしいと願っています。

植えた方の思いや育てたいと思った最初の思いも知って、つないで下さいね。

活動を始めた当時の女子生徒 野澤長子さん



桜並木だって、いいことばかりじゃない。

桜はきれいに咲くけれど、沿線の人の気持ちは複雑……

害虫
落ち葉
花びらの掃除
枝が折れた！

地域の人と一緒に考えました。

立場が違えば見方も違うんだ。

いろんな人と「桜」について話をしました。



長野市立 保科小学校

ノーマライゼーションを体感！ 「絆プロジェクト」 障害者施設との交流活動



アトリエ CoCo の皆さんと2年間にわたって交流をしました。

障害のある人に怖れや先入観もあった子どもたち。学校の近くにある施設で働く人たちと出会いました。障害があっても、仕事熱心で、明るくて、優しく、一緒にいるととても楽しい人たち。「みんな友達になる」って、わくわくするね。

アトリエ CoCoとの交流活動「絆プロジェクト」

ある日、長野市立保科小学校の5学年を受け持つ篠原先生は、子どもたちが障害者に対しての理解が不足していることで、差別的な言葉を使っていることを聞きました。ショックを受けた先生は、学級で話し合いの場をもちました。

学級で話し合うことで子どもたちはすぐに「反省した」と言ったけれど、本当に心で受け止めてもらえただろうか、障害のある人を心で理解し、共に生きていける人になってほしいのだけど……。

そんな思いを抱えた先生は、学区内に障害者の施設「アトリエ CoCo」があることに気づきます。さっそく施設長の綿貫好子さんに相談。真夏の暑い日、子どもたちは施設見学に行きました。「障害のある人は、どんな人だろう」。そう思いながらの訪問でした。

CoCoの皆さんの仕事は高温の中でのクリーニング作業や、野菜の出荷。暑い中での重労働に、一生懸命取り組んでいました。「障害者は何もできないか

ら、仕事も簡単」と思っていた子どもたちの先入観が吹き飛びました。CoCoの皆さんは初めて会ったのに、笑顔で迎えてくれました。「障害があっても、できることを頑張っていて、私よりずっとすごい」「帰るとき、見えなくなるまで手を振ってくれたよ」……子どもたちは驚き、感動し、もっとその人たちのことを知りたくなりました。こうして、交流活動「絆プロジェクト」が始まりました。

みんな一緒に生きている、それが「ノーマライゼーション」

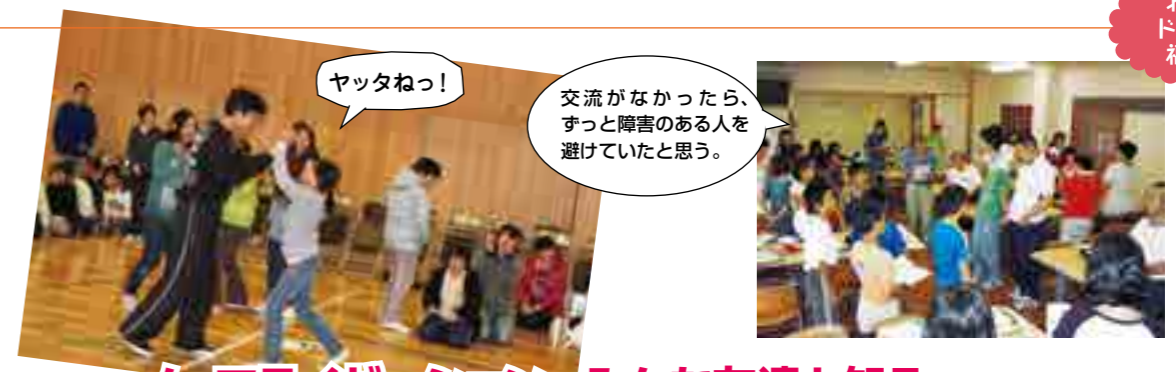
交流では一緒にものを作り、ゲームをしました。教えたり、教えられたり、協力して何かをしたりする、双方向の交流です。

歌を歌うと、一緒に歌い踊って嬉しい気持ちを全身で表現する CoCo の皆さん。初めは驚きましたが、まっすぐに気持ちを伝えてくれるので、みんな嬉しくなってノリノリ。ゲームをすれば、勝っても負けてもみんなハイタッチ！回を重ねるごとに、子どもたちは、どうしたら一緒に楽しめるかを調べ、工夫して企画す

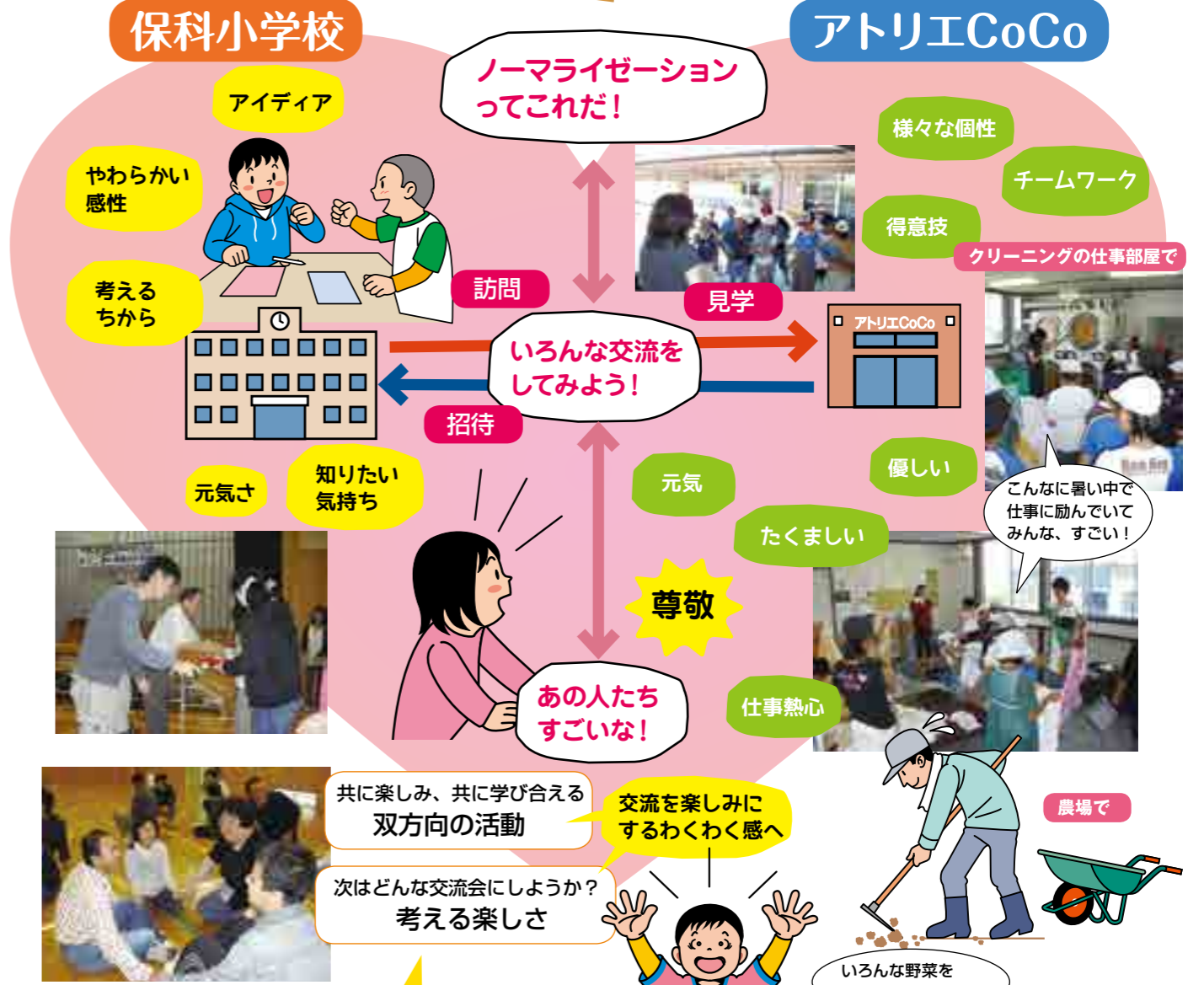
るようになりました。耳の不自由な人には、覚えてたの手話でこちなく話しかけました。新築された体育館に招待し、手作りのおやつでもてなしました。CoCoの皆さんは、子どもたちと共に過ごす時間を心から楽しんでくれました。

「絆プロジェクト」は、子どもたちが卒業するまで続けました。6年生の3月。最後の交流会では、CoCoの皆さんが、この日のための特別な替え歌を歌ってくれました。思い出の写真で一緒に葉を作り、アトリエ CoCo からの感謝状をもらいました。「この交流がなかったら、私はずっと障害のある人を避けていたと思います。でも、皆さんに会って、みんなと同じなんだと思いました」「これで最後だと思うと、さみしい……」。

綿貫さんは、「ノーマライゼーション」という言葉を教えてくださいました。「どんな人でも、地域で生活をしていくこと」、つまり「みんな友達」ということ。アトリエ CoCo の皆さんを、子どもたちは友達として、心から尊敬しています。それが「ノーマライゼーション」なのです。



ノーマライゼーション=みんな友達と知る



共に楽しみ、共に学び合える
双方向の活動
交流を楽しみにするわくわく感へ
次はどんな交流会にしようか？
考える楽しさ



●担任の篠原賢朗先生より
— の交流は、初めは特別な見通しも持たずに始まりました。しかし、回を重ねるたびに、子どもたちはアトリエ CoCo の人々を大好きになっていきました。明るく、屈託なく、楽しければ体全体で表現してくれる人々。ゲームをしても、勝ち負けに関係なくお互いを讃え合う人々に、心から感動することができました。予想以上の、教室だけでは学べない多くのことを教えていただきました。
この交流から学んだことは、子どもたちの心の中にあたたかい思い出として残り、これから「ノーマライゼーションの世の中」を作っていく大切な基礎となると思います。



最後の交流会では、CoCoの皆さんから感謝状をもらい、みんな感動しました。「こちらこそ、楽しい時間を本当にありがとう！」。

シカの食害問題から学ぶふるさとでの自然のこと



ニッコウキスゲのお花畑をよみがえらせよう(霧ヶ峰高原で)



シカを取り巻く環境を知って、いろいろな意見が次々と……

豊かなふるさとでの自然について、環境問題について、低学年の子どもたちと考えてみたい…。先生の願いからはじまった「シカの授業」。シカの食害を切り口にしたのは、先生自身のテーマでもあったから。子どもたちは柔軟な発想と体験を通して、この難しい課題に楽しく取り組んでいます。

新聞記事やニュース映像でシカの食害の実態を知る

平成23年度に開校したばかりの長野日本大学学園長野小学校では、第1期生が1年生の時から、シカの食害を切り口に環境問題を学んでいます。市街地の学校で、なぜ「シカの食害」を？担当の清水先生は、以前は放送局の記者としてシカの問題を追いかけていました。自然環境をめぐるいろいろな課題が、シカから見えてくることを実感しました。その広がりや、子どもたちとともに味わいたいという思いで、この授業を始めました。授業では、子ども用に書き直した新聞記事や、ニュース映像などを通して、市街地では直接見えない食害の様子に触れます。シカに食べ尽くされてしまった森の様子、そのために起きた土砂崩れや、その土砂に埋まってしまった水源地を見て、子どもたちは驚きました。「シカも悪くないけど、森がかわいそう」「森が、シカに殺されちゃうよ」「山とぼくらが住ん

でいるところは全然違うけど、シカが木を食べてしまうといろんな危険なことが、ぼくらの周りでも起きちゃうかもしれないんだ!」。「なぜこんなにシカが増えたの？」天敵のニホンオオカミがいなくなってしまったこと、ハンターが高齢化していること、森に手が入らなくなったこと、環境破壊など、人間のくらしが変わってきたことが、その背景にあると知りました。人間にも責任がある、ということが、子どもたちには衝撃です。**解決のためにできることは？ 自由な発想が気づきを深める**シカの駆除という難しい問題についても話し合いました。本物の罾にも触れました。「人間のせいなのに、かわいそう」「せめて子ジカは撃たないであげて」「落とし穴で捕まえて、動物園に連れて行こうよ」など、様々な意見が出てきます。話し合いはいつも白熱します。シカの数を増やさないと、シカに荒らされた森を復活させることの両方が必

要なんだ、と気づいた子どもたち。話し合いの中で、シカに食い荒らされた霧ヶ峰高原(諏訪市)のニッコウキスゲのお花畑をよみがえらせたい、という意見が出てきました。地元の小和田牧野農業協同組合の皆さんに種を分けてもらい、学校で育てて、みんなで霧ヶ峰高原に植えました。地元の皆さんと一緒に勉強会もしました。長野県の自然の豊かさ、様々な生きものの存在、自然と人のくらしとのつながりなど、低学年の子どもたちはたくさんを学びました。どんなに複雑な課題でも、解決のためにできることは必ずある。まずできることから始めるということも、この授業を通して先生が子どもたちに学んでほしいことでした。シカの食害は、中山間地の過疎・高齢化や、森林の荒廃、土砂災害や水資源の問題、地球温暖化とも深くつながっています。シカをきっかけに気づいた環境問題へのまなざしをさらに深め、学び続けていきたいと、先生は考えています。

シカも森も人間も仲良く生きられるように!

学校で種から育てた苗を、みんなで霧ヶ峰高原に植えました。

ニッコウキスゲの苗を植えよう!

シカの食害が深刻化している霧ヶ峰高原へ

ニッコウキスゲのお花畑をよみがえらせたい

ニッコウキスゲの種をもらって学校で苗を育てました。

シカに荒らされた森を復活させよう

被害を減らそうと取り組む人たちを紹介。

銃以外で捕獲する方法は?

わなを設置する

落とし穴を作る

捕獲して動物園へ

シカをこれ以上、増やさないために

シカは悪くない、かわいそう

シカから自然を守るためには?

電気柵を設置する

嫌いな物を置く

駆除する

どうしてシカによる被害が増えたんだろう?

猟友会員の減少(高齢化)

中山間地の過疎化

地球温暖化?

ニュース番組

新聞

生活科の時間に、シカによる農林業被害について、新聞記事やテレビの特集番組を教材に授業を開始。

すごい!こんなわながあるんだ!

くくりわな

●担任の清水きく江先生より
シカの授業は、本当は高学年で取り組む予定でした。しかし、一度やってみると、1年生でも環境問題や山間地が抱える問題に対して真剣に向き合い、熱心に話し合っていて、その姿には正直驚きました。子どもなりの柔軟なアイデアから、課題解決に向けた対策が生まれるかもしれません。未来を担う子どもたちが、故郷=信州の自然をどう守っていったらいいのか、シカの食害をきっかけに自ら考え、実践していけるまでに成長してくれたらと願っています。

長野清泉女学院高等学校

「いのち」の重みを受け止め いとおしむワークショップ体験



設問に対して色紙で答える旗揚げアンケート。すぐに集計して、全体で意見交換を行います。



アイスブレイクでリラックス

先生も生徒も一緒に学びます。

大きなテーマを真剣に 楽しく考える2日間

長野清泉女学院高等学校は、県内唯一のミッションスクールで、カトリックの精神に基づいた教育を行っています。「ミッションスクールとして、生徒のいのちへの感性を育み、他者に積極的に働きかけることができる女性を育てる体験学習の場を設けたい」という先生方の願いから、毎年夏休みに、ワークショップ「いのちのまなざしを深めるために」が開催されています。このワークショップは今年で7回目となりました。

「いのち」って何? 「生きている」ってどういうこと? 大きなテーマを真剣に、楽しく考える2日間。「いのち」に向き合う職業(医療・看護、福祉・幼児教育など)をめざす生徒たちと先生方が参加します。

「あなたの子どもに障害があることがわかったとしたら」

1日目は、まずコミュニケーションを学ぶ講座。ファシリテーターの内山二郎先生による身体を使ったコミュニケーションや傾聴体験で、自分の気持ちをのびのびと表現する楽しさ、受け止めて

もらう嬉しさを体験します。

心と身体がほぐれたら、午後は「いのち」についての多様な価値観に触れる、旗揚げアンケート方式ディスカッション。「生まれ変わったら何になりたい?」「今の自分に生まれてよかったと思うのはどんなところ?」などの問いかけに答えていきます。ワークショップの中では、どんな意見もその場限りのものとして自由に発言することが約束ですが、短い時間の中で決断をし、意思表示をしなくてはなりません。

この日最後の質問は、「出生前診断で、あなたの子どもに障害があることがわかったらどうしますか?」。この問いに対して、先生方も驚くほど様々な答えが出ました。女性は誰でも直面する可能性がある、そして社会でも大きく取り上げられている難問です。胎児のいのちは誰のもの? 幸せな人生って何だろう。家族ってなんだろう。そもそも、いのちって何? それぞれが真剣に考えた重い決断を内山先生は丁寧に拾い上げ、「いのちって何だろう」という問いとして返します。

2日目は、ボランティア体験。市内で活動する様々なグループの方に、活動への思いを聞きました。前日の「いのち」への問いが頭に残る生徒たちに、障害

を持って生まれた息子さんを持つお父さんが、こんなことを話してくれました。「障害のある子は、実は親を選んで生まれてくるそうです。その言葉に出会って、私はこの子の障害を悲しむのではなく、共に楽しく生きていこうと決めました」。参加していた生徒たちも先生方も、その言葉に圧倒されました。

教科学習では学べない 本当に大切なことを

一般に、高校生では体験学習の機会が激減します。長野清泉女学院では、出会い、体験するこのワークショップは生徒の人間性を育む大切な場だと考え、担当の先生方が丁寧に計画しています。プログラムの企画には、長野市ボランティアセンターが全面的に協力し、学校と社会をつなぐ役割を果たしています。

経済・効率重視の世の中で、本当に大切なものは何か。生きているってなんだろう。これから自分はどう生きていくか。すべての人間関係の基盤にある、「いのち」をいとおしむ心。このワークショップは、たくさんの人との出会いの中から、教科学習では学べない大切なことを学ぶ場となっています。

ワークショップ●旗揚げアンケート方式ディスカッション

「いのち」について考えよう!

設問について、自分の気持ちに一番近い色紙を1枚あげましょう

ワークのねらい

- ◎自分の考え方を整理しましょう
- ◎自分とは違う、いろいろな考え方や価値観があることを理解しましょう
- ◎ワークを通して「いのち」についてどんなことに気づいたか話し合しましょう

設問 生まれ変わるとしたら、あなたは何に生まれ変わりたいですか?

- ①青 人間
- ②赤 動物、虫、魚など
- ③緑 植物
- ④黄 生き物以外(空気、石、星など)
- ⑤白 その他



内山先生のワークは楽しく、そして時に鋭く、生徒たちの心を開いてゆきます。

●長野市ボランティアセンター 阿部今日子さんより

プログラムが長く続く間に生徒さんたちの様子も少しずつ変化して来ています。以前授業でやっていたロールプレイという形が成立しにくくなっていて感じました。ただ、それは巷で言われる「コミュニケーション力が不足している」というより、自己表現する場が普段の生活の中で不足しているのではないかと思います。

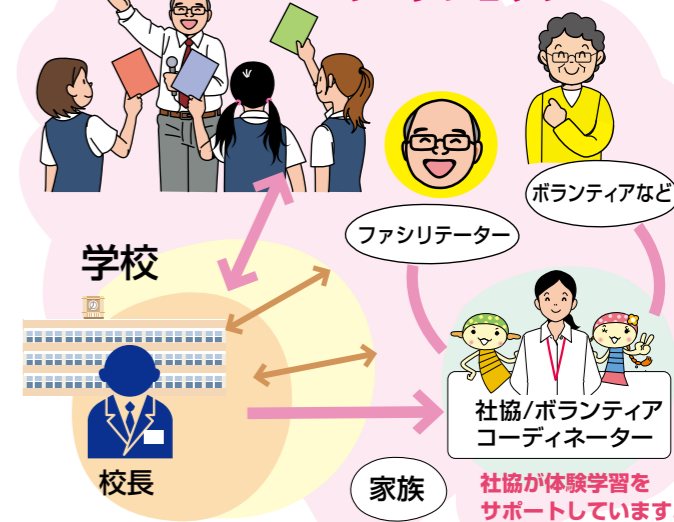
そこで、今年は先生方と相談し、「いのち」というテーマをよりクローズアップしようと、少し重いテーマをあえて生徒さんたちにぶつけてみました。結果はご覧の通り。大人でも困惑するような問いに、生徒さんは正面から向き合ってくれました。互いの意見を受け止め、「でも、私はこう思う」としっかり自分の意見も積極的に発言。思いを伝え合うこと、そこからあらためて「いのち」について考え合うことができたと思います。

大人になっていく女の子たちに、「いのち」について深く考える心を持ってほしい。先生方の思いが、様々な人たちと出会う楽しいワークショップになりました。夏の2日間、参加者は様々な「いのち」のありように触れ、考え、五感でそのいとおしさを受け止めています。

設問 出生前診断で、あなたの子どもに障害があることがわかったらどうしますか?

- ①青 たとえ障害があっても、授かった「いのち」に変わりはないので産む
- ②赤 子どもには健全な体で育てたいので産まない
- ③緑 子どもの将来の幸せを考えると産まないほうが良いと思う
- ④黄 自分だけでは決められない。パートナーや家族と決める
- ⑤白 その他

みんなでのちを考える ワークショップ



地域で活動するみなさんの温かさが生徒たちのころをほころばせてくれます。

●長野清泉女学院高等学校 担当の竹村正之先生より

たった2日間の体験学習ですが、若い生徒たちには、自分を見つめなおし、人とのあり方を真剣に考える大変貴重な体験の場になっているように思います。中にはこのワークショップを機に自分の進路の方向性を定めたり、ボランティア活動を始める生徒もいますが、多くの生徒にとっては、ここでの学びを現実の場でどう生かしていくかが大きな課題となっています。今後も多くの方々のご協力を得ながら、より充実したワークショップにして行きたいと考えています。

長野県 北部高等学校

高齢者にケータイ操作法を指南 地域授業「超ボランティア」の活動から



超ボランティア班による携帯電話講座



フロアホッケー体験



スマイルボウリングで高齢者の方々と交流

北部高校には「地域」という授業があります。地域の産業や文化・歴史を学んだり、自分の進路を見つめるために、社会人講師の方々からお話を聞くなど学習内容は様々です。「生きた教材」におおいに触れて、豊かな感性を磨いています。

県内の高校では唯一の科目 体系化された「地域」の授業

飯綱町にある長野県北部高等学校では、県内の高校としては唯一「地域」という授業(以下、地域授業)を設けています。地域授業では、地域の産業や文化、歴史を学んだり、自分の進路を見つめるために、ゲスト講師を呼んで話を聞いたり、内容は様々ですが、いずれも地域の方々に学んでいます。

1年次はクラスごとの体験学習を中心に、さらに2年次には自分の興味関心に沿ったテーマを選択し、年間を通じて学習します。

2年次はそれぞれ「班」として、保育、超ボランティア、郷土料理、地域の自然、文化・歴史などに分かれ、活動します。

高齢者のハートをゲット! 超ボランティアの携帯電話講座

地域授業の中でもその名称から強い印象を受けるのが「超ボランティア」班です。その名の通り、「超ボランティア=ボラン

ティアを超えるボランティア」。

最近行った活動の中で、特に地域の皆さんに好評だったのが、「携帯電話講座」です。携帯を持っていても若い人のように使いこなせない高齢者を対象に、生徒たちがマンツーマンでその使い方を教えます。

地域の方に教えていただくだけでなく、自分たちが地域で教えられることはないか…「携帯電話講座」は、そんな思いで生徒たちが発案。飯綱町ボランティアセンターのコーディネーターに相談しました。「そういえば、電話で話すのはできるけれど、それ以上使えない人も多い」と、ユニークな提案にコーディネーターのほうも気づかされました。ボランティアセンターでは、チラシや有線放送で宣伝したり、会場を設定したりと、彼らの活動をバックアップしました。

受講者は、孫のような高校生たちと、雑誌をしながら、気兼ねなく携帯電話の操作法を教してもらい、講義はもちろんですが、それ以上に楽しい時間を過ごせて嬉しかったという方も多かったそうで

す。回を重ねるごとに、準備にもますます力が入るようになりました。生徒たちも、「地域の方と話せて楽しかった」「教えるのって大変」「人生の先輩からいろんなアドバイスをいただけてよかった」と、この出会いから多くのことを感じていました。

地域授業はカリキュラムに組み込まれた正課活動で、厳密にはボランティア(自発的な活動)ではないかもしれませんが。時には希望に反して「超ボランティア」班に振り分けられることもあります。「超ボランティア」班で1年間活動をした生徒の中にも、「ボランティアなんてだるい」と言う男子生徒がいました。けれども実際にやってみたら、いつの間にか誰よりも楽しく話し、仲良くなっていったそうです。

自分たちの得意なことから発想し、コーディネーターなどの関係者に相談をしながら実際にやってみる。地域の方に喜ばれたという達成感が次の活動につながります。地域の人々の中で、自分の可能性にも出会えます。地域授業は、生徒たちに「出会い」の喜びも教えてくれます。



携帯電話講座



「超ボランティア」班で活動した

生徒会議長 2年 青木恵己里さん

生徒会長 2年 小林奏太さん

携帯電話講座に参加した生徒たちの感想

メモを取りながら聞いてくれてうれしかった。教えることの難しさを学んだ。

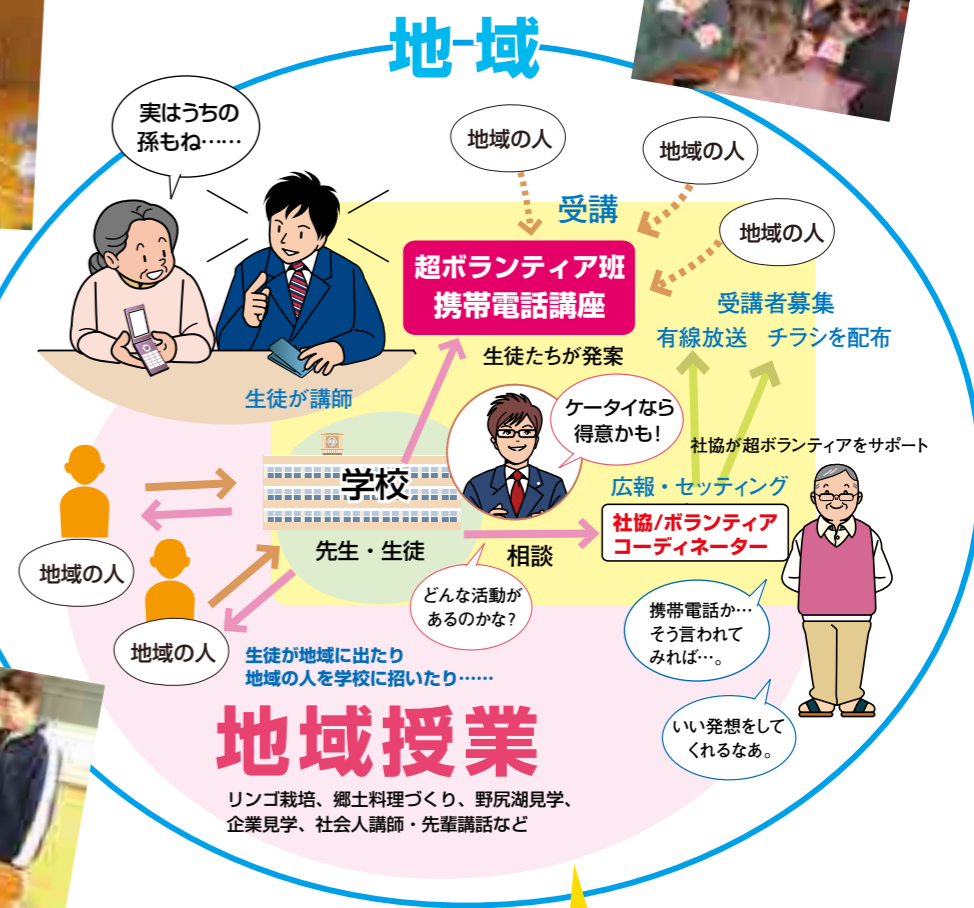
知らない地元の話とかも聞けて、逆にいろいろなことを教えてもらった。自分のおばあちゃんの家に行っている気分で楽しかった。

初めはボランティアなんてっていう気持ちだったけど、ボランティアにもいろいろな形があるってわかった。

超ボランティア班の活動



超ボランティアでは、障害者や高齢者の方との交流を中心に、携帯電話講座、ティサービスでのお手伝いやフロアホッケー、スマイルボウリング、福祉体験などの活動をしました。



地域授業

リンゴ栽培、郷土料理づくり、野尻湖見学、企業見学、社会人講師・先輩講話など



年度末には全校で地域授業発表会を行います

●北部高校「超ボランティア」班顧問の間部一男先生より
超ボランティアとは、周りから見るとボランティア活動なんだけれど、活動している本人はボランティアを意識することなく、多方面にわたって自主的に取り組むことを目的とする意味合いがあるのではないかと思います。私は着任して1年目でしたので、当初は違和感がありましたが、地域や社協の方々にお手伝いいただき、生徒と一緒に活動してとても楽しい経験をさせてもらいました。毎回初体験の活動ばかりで戸惑っていた生徒も、回を重ねるごとに次は何をするのか、楽しみにしていたようです。

千曲市立 埴生小学校

地域の身近な人たちとのふれあい
ともに生きていくことのできる私たちに



更埴デイサービスセンターの皆さんとの交流

埴生小学校ボランティア委員会では、更埴デイサービスセンターの皆さんとの交流を行なっています。交流会では一緒に「ふるさと」を歌うと、おじいさん・おばあさんはとても楽しそうで、私たちまで楽しい気持ちになりました。

また、牛乳パックで作った箸置をプレゼントすると、とても喜んでくださいました。他にも昔の遊びや趣味について、一つずついねいに話してくださいました。中には泣いているおじいさんもいて、理由

を聞いてみると、私たちと話ができてうれしかったと言ってくださいました。交流会から帰るときは、「今日はありがとう」と言ってくださり、私たちも心から「ありがとうございました」と言いました。はじめは緊張していたけれど、笑顔があふれるいい交流会になりました。私は、いっしょに住んでいるうちのおばあちゃんとも、これからもたくさん話をしようと思いました。

また、総合的な学習の時間を使って、稲荷山養護学校の友だちとも楽しい交流

をしています。このように身近な人たちとたくさんふれあい、楽しい時間を過ごしながら絆を深め、同じ地域の中でともに生きていくことのできる私たちになりたいと思います。



稲荷山養護学校の友だちと

南木曾町立 南木曾小学校

南木曾町のお宝発見！
魅力ある「触れ合い」「体験」を通して



田立地区でのお茶摘み

読書地区での林業体験

▲5・6年生が中心となり1芯3葉(若葉が3枚)だけを摘み取ります。摘んだお茶は給食で飲んだり、お世話になった方々へ贈呈しています。

▲植樹・伐木・ベンチ作り体験や、貯木場・製材所・松皮の見学を通し、全国で愛される木曾ヒノキや生活を支える木の学習をしています。

南木曾小学校では、田立小、蘭小、読書小の三つの小学校が統合して6年目を迎えました。統合をきっかけに、遠足では6年間のうちにすべての地域を訪れています。また、生活科や総合的な学習の時間では、「南木曾と木」「南木曾と水」「南木曾と道(中山道)」といったように、南

木曾町の豊かな自然や文化・歴史を題材にして、学年ごとにテーマを決めて地域と関わりながら魅力ある学習をしています。

このように、たくさんの地域の方々との「触れ合い」「体験」を通して、南木曾の誇れる宝を発見しています。

パンフレット配り

妻籠宿はいいところですよ
▲多くの方に妻籠宿に来てもらおうと、手作りパンフレットを修学旅行(上野)で配りました。「ぜひ行きます」「見やすい案内ですね」など、お手紙もたくさんいただきました。

箕輪町立 箕輪西小学校

地域の伝統芸能を受け継いで
長い歴史と伝統に支えられた古田人形芝居



箕輪西小学校には、平成4年に始まった古田人形クラブがあります。平成24年度は4～6年生の22名が参加し、課外活動クラブとして21年目を迎えました。古田人形芝居保存会の先生方にご指導いただき、11月の校内発表会・12月の定期公演に向けて、練習をしています。

演目は、女の子が生き別れの両親を訪ねる話「傾城阿波鳴門・順礼歌の段」で、語り役や人形役・口上など多くの役割で

構成されています。一つの人形を3人の遣い手で操作するのですが、人間の動きに少しでも近づけられるように細かい工夫が必要です。

また、全員が心を一つにして、集中して演じないといい発表にはなりません。これからもみんなでしっかり練習して、見る人の心に残る発表になるようがんばりたいです。

300年近い歴史の中で何度も消えかけたことがあったようですが、卒業した先輩の中には、箕輪中学校古田人形部や保存会に入り、この大切な文化を守ろうとがんばっている方もいます。私たちも、長い歴史と伝統に支えられ、地域や先輩の方々の方々の努力で続いてきた古田人形芝居を大切にしていきたいです。そして、次の世代へと伝えていけたらいいなと思っています。

須坂市立 須坂小学校

地域に学ぶ「くぬぎの時間」
地域の先輩方とのふれあいを通して



250年前から続く笠鉾行列に参加

昔の遊びに挑戦講座

平安時代の須坂は「櫛原荘」と呼ばれていたことから、須坂小学校の校章にはくぬぎの葉が3枚使われ、総合的な学習の時間は「くぬぎの時間」と呼ばれています。3～6年生が交流する縦割り活動では、地域の方々を講師に招き、5つの講座が開かれています。

「福祉体験講座」では、社会福祉協議会の方々を講師にさせていただきました。学校の近くにある施設のお年寄りとの交流

したり、お年寄りのことを知るために「高齢者疑似体験」や「車いす体験」をしました。

このほかに竹とんぼや水鉄砲を作って遊ぶ「昔の遊びに挑戦講座」、地元の料理「こねつけ」などを作る「郷土料理講座」、昆虫や植物、岩石を調べる「鎌田山講座」、お雛子を教えていただく「神楽・笠鉾講座」があります。

地域の先輩である講師の方々からは、

「子どもに教えるのはとても楽しい」「目を輝かせて話を聞き、真剣にやっている姿を見ることは元気の源だ」とお聞きしました。地域の方々との関わりを通して地域の良さに気づき、須坂の伝統を受け継いでいくことの大切さを教えていただいています。

上田市長和町 依田窪南部中学校

ネパールでみた“Yodakubo”
N(南部)マークのカバンで通うネパールの学生



ネパールの小学校

南部中のカバンを背負って登校しています。

●ネパールと日本の違い●

国名	ネパール	日本
総人口	2,460万人	1億2,750万人
1人当りの国民総所得	230ドル	33,550ドル
乳幼児死亡率(対1,000人)	66人	3人
妊産婦死亡率(対10,000人)	740人	10人
15歳以上人口の識字率	42%	-

出典：ユニセフ「世界子ども白書 2004」

依田窪南部中学校ではボランティア委員会の活動として、2001年からネパールの学校へ通学カバンを送っています。現地へはJAITI(公益財団法人日本農業研修場協力団)を通して送っていただいています。箱に詰めて送ると輸送費がかかるため、現地に行く際に手荷物として持って行っていただいています。

標高は、2,350 m。学校が集落から離れたところにあり、通学には遠いところで片道2時間半もかけて歩いて通っている生徒もいるそうです。

筆記用具などの学用品も十分でなく、カバンの代わりに布を使っています。現地の様子を撮影した写真には「N」のマークのカバンが映っていました。私たちにとっては不要になったカバンですが、現地の皆さんが長距離の通学で大切に使用されている様子を見ると、とても嬉しいです。

同時に私たちは、まだまだ使えるものを捨てていたり、まだ十分使えるのに新しいものを買ったりしていることに気が付かされました。今後この活動を通して、ネパールの現状を知り、活動の意義を学んでいきたいです。



ネパールの国旗

“Yodakubo”という名前の教室があります

安曇野市立 堀金中学校

夏休みのトマト収穫作業
伝統行事を受け継いで



炎天下の中での収穫作業



文化祭でのリヤカーの贈呈式

堀金中学校では、様々な福祉活動を行っています。その中でも大きな活動は『トマト収穫作業』です。20年以上前から伝統的に行われている行事で、生徒会役員が中心となって計画し、夏休みに全校生徒が集まってトマトの収穫作業をします。

で汗を流しながら、お互いを励まし合い、一生懸命トマトを収穫しました。みんなの心配をよそに、トマトが入ったケースは増えていき、ピカピカに光る真っ赤なトマトが大量に採れました。

今年は暑い日が続いたので、トマトがかなり傷んでしまっており、ちゃんと採れるのか不安でした。しかも収穫日当日は太陽がこれでもかと照りつける炎天下。とても暑い中の大変な作業でしたが、みんな

採ったトマトは加工工場に出荷します。その収益金の一部と、毎週行われているアルミ缶回収の収益金を合わせて、物品を購入し、安曇野市社会福祉協議会堀金支所に寄贈しています。今までに車イスや災害時用の発電機等を贈ってきました。

今年は支所の希望により、リヤカーを購入し、文化祭で贈呈式を行いました。リヤカーは、農作業などで活躍しているようです。これからも、伝統行事として後輩に受け継いでいってほしいと思います。



赤くてピカピカ！おいしそうでしょ！

松本市山形村朝日村 鉢盛中学校

SO交流で広げよう、心のつながり！
アスリートの方々とともに、スポーツで汗を流す



バスケットボールの試合

SO(スペシャルオリンピックス)とは、知的障害のある方にスポーツレーニングと競技会を提供している国際的なスポーツ組織のことで、そして、SOに参加する選手をアスリートと呼んでいます。



フロアホッケーの試合



▲まとめの会では自然に車座も小さくなります。

楽しくできたね。

鉢盛中学校では、生徒会活動や総合的な学習の時間の一環として「SO(スペシャルオリンピックス)交流」を行っています。交流は月に1~2回程度、アスリートの方々に中学校の体育館に来ていただき、日曜日の午前中に行われます。中学校からは福祉交流委員とボランティア参加の生徒が毎回30名ほど参加し、アスリートの方々とバスケットボールやフロアホッケーに取り組み、スポーツを通して交流を深めています。

最初は緊張気味の生徒も、アスリートの方々が笑顔で声をかけてくれるので、バス練習や作戦タイム、試合を重ねていくうちに、自然と会話がはずむようになっていきます。まとめの会では、心の距離がぐっと近づいた現れとして車座も小さくなり、うちとけた表情で感想を伝えあい、最後は再会を願ってハイタッチでお別れします。

交流を通して生徒は、アスリートの方々のペースに合わせて活動すること、アスリートの方々に伝わるていねいな言葉づかいを意識することを学んでいきます。そして、日常の学校生活においても相手の意識に立って行動できる生徒が確実に増えているように感じます。今後さらに、「SO交流」の輪を全校に広げていきたいと思っています。



ハイタッチでお別れ

交流を通して生徒は、アスリートの方々のペースに合わせて活動すること、アスリートの方々に伝わるていねいな言葉づか

長野市立 櫻ヶ岡中学校

地域に発信! サクラプロジェクト
桜の花を通じて地域とつながりたい



押し花と菜づくり



◀押し花をラミネート加工して菜に。校内バザーでは1枚100円で約300枚の菜を販売し、売上金を日本赤十字社に寄付しました。



地元商店街の夏祭りで菜を販売

◀放課後希望者が集まり、講師の方に教えていただきながら押し花を作成。

櫻ヶ岡中学校では、4月にたくさんの桜の花が咲きほこり、周辺地域の方々に長年親しまれてきました。しかし校舎の改築に伴い、校門前をはじめ、何本かの桜の木は切られてしまうことになりました。

売上金は東日本大震災の義援金として寄付しました。

平成23年度、散っていく桜を見た学年清美委員長の「この桜の美しさを保ちたい」という思いから、清美委員会と緑化委員会が中心になって、本校の桜の花びらを使った押し花の菜を作る活動を始めました。菜は秋の校内バザーで販売し、

平成24年度は総合的な学習の時間を使い、さらにこの活動を発展させようとして取り組んでいます。総合のテーマは『創ろう・造ろう 私にとってのふるさとサクラ〜地域に発信! サクラ〇〇プロジェクト』(p.3参照)。これは自分たちの地域のことを

もっと知ろうという学びです。プロジェクトの一つである桜グループでは地元商店街の夏祭りに参加し、今年咲いた最後の桜の菜を販売しました。収益金は新校舎完成時に植樹するための苗木に変えました。やがてきれいな桜を咲かせ、再び地域の皆さんにも喜んでいただけたらいいなと思っています。

櫻中のシンボルである桜を通して、これからも地域とのつながりを大切に活動が続けていきます。

楽しくなくっちゃウソ！の福祉教育は、 たとえばこんな授業です。

学校や地域で活躍している講師の皆さんが、福祉教育の体験授業をしてくれました。

こんな授業で、みんながわくわく・ドキドキ！

(平成25年2月2日「福祉教育のつどい」(長野市ふれあい福祉センター)より)

車椅子で遊ぼう！

先生：NPO 法人ヒューマンネットながの
川崎昭仁さん

自身も電動車椅子を使用している講師をお迎えして、車椅子体験を実施。学校の先生や中学生、ボランティアセンターの運営委員などが参加しました。

まずは車椅子で鬼ごっこ。これは車椅子の操作に慣れるために車椅子バスケの準備運動でよくやるものだそうです。片側の壁に並んだ“子”たちが会場の真ん中で待ち構える“鬼”に捕まらずに反対側の壁に逃げ切れたらOK。

捕まった子は次回から鬼になり、回を重ねるごとに鬼が増えていきます。もちろん、鬼も子も車椅子に乗っています。

1回目はベテラン男性教師が鬼。10人を超える子を相手に一人も捕まえることができません。鬼も逃げる子も慣れない車椅子の操作に悪戦苦闘。しかし回を重ねるごとに一人二人と捕まえることができ、次第に鬼と子の人数は逆転。鬼同士で作戦会議を開き、子を囲い込み捕まえます。終わる頃には鬼も子もすっかり車椅子の操作に慣れ、参加者一同もっとやりたいと声を揃えました。

体験した先生からは「学校の車椅子体験では、車椅子で



遊ぶなと教えていた。逆転の発想で楽しく体験できた。学校でもやってみたい」との感想がありました。川崎さん「車椅子に乗っているから遊べないのではなく、車椅子に乗っている子と一緒に遊べる。楽しみながら体験すれば、それがわかります」と話していました。

後半は、車椅子に乗る人とアイマスクをして押す人がペアになり、車椅子に乗っている人の指示を受けながら車椅子を押し、並べたペットボトルを倒していくゲームも行いました。時間が足りず、もっと遊びたい、そんな車椅子体験でした。

視覚障害がある方と、すいとんを作ろう！

先生：上村美佐登さん(木曾町)
笹川文字子さん(木曾町)



食事は毎日の生活の基本です。目が見えない人は、食事をどうしているんだろう？じゃあ、一緒に作ってみよう。今日の先生は、視覚障害があるけれど、料理の名人です。

先生が野菜を刻む手つきは、本当は見えているのではと思うくらい軽やか。むしろ参加した先生方や学生さんのほ

うが危なっかしい手つきです。「今日のにんじんは大きいね。縦4つに割って、薄く切って」。見えていないのにわかるんだ！おっかなびっくり切り始めた中学生が、まな板の上を指さし「こんな感じで…」と言いかけたあと、「5ミリ位のちょう切りでいいですか?」。言葉で具体的に伝えることが大事だと気づきます。「いい香りがしてきたね。すいとんは4本の指でつまんでお鍋に入れてね」。音や香り、指の感触が目の代わり。ぽんぽんと鍋に投げ込むお団子は、大きさもそろっていて、おいしそう！

できあがったすいとん汁と、自家製の木曾^{あかかぶつ}赤蕪漬けをいただきながらお話をしました。ご家族の食事をいつもこんなふう^{あかかぶつ}に作っていて、三味線や遠出が大好きなお二人。「料理は手が覚えているの。できることは自分でやりながら暮らして、毎日幸せよ」。その言葉を味わう授業でした。

生まれてくるってどんな感じ？

先生：NPO 法人 ながのこどもの城いきいきプロジェクト
田中春海さん



出産直後、お母さんのお腹の上を誕生したばかりの赤ちゃんがおっぱいを探してにじりあがっていく。首のすわらない赤ちゃんが

コップからミルクを飲む…驚きの映像に初っ端から命のたくましさを感じます。早速2人一組になってコップに入れた水を飲ませ合いつこ。赤ちゃん役は首がすわっていないので、首を支えてコップを傾けると、ちゃんと飲めた！災害時でもコップさえあればミルクを飲まされて衛生的にもいいとのこと。赤ちゃんが苦しい思いをしないように、様子をしっかりと見ながらでな

いと上手くできません。

子宮に入る体験では、大きくて真っ暗な袋に赤ちゃん役の人が入ります。回りの人は袋の上からさすったり、声をかけたり…。中に入った人に聞くと真っ暗なのに全然怖くなかったそう。それどころか「親に対して感謝の気持ちが生まれました」という感想でした。また、紙に自分でエコマップ(家系図)を書くワークでは○と線で先祖へとつないでいくと、自分が存在するためにたくさんの人がいたことが実感できます。

どれも命の大切さ、重さを感じる感動的な体験で、幸せな時間を過ごしました。



遊びから考えるコミュニケーション

先生：ブラインドサッカー「FCレインボー」
中沢 匠さん



「ブラインドサッカー」は、視覚に障害のある人もそうでない人も同じフィールドでプレーするユニバーサルスポーツ。視覚に障害がある当事者でもある中沢さんは、

チームプレーに欠かせないコミュニケーションを通し、様々なかたちの「伝え方」を編み出しています。

まずは簡単な遊びからスタート。約20人の参加者が全員アイマスクを着け、手をつないで輪になります。中沢さんが1回笛を吹いたら「右」、2回吹いたら「左」に回るという、シンプルなゲーム。ところが、これがなかなかうまくいきません。他の人の動きが見えない中で、どちらに回るかまどい、お

隣とぶつかることもしばしば。そこで中沢さんからヒントです。「声に出して共有しましょう」と。言われてみれば簡単なこと。「右!」「左!」と声をかけ合うだけで、たちまち動きがピタリと揃って、くるくると輪が回ります。みんなが笑顔になってきました。

続いて、中沢さん得意のブラインドサッカーを少し体験。10mくらい離れたコーンをゴールに見立て、アイマスクを着けたプレーヤーがシュートします。ゴールではサポーター役が「ハイ!」「ハイ!」と声をかけ、ゴール位置へ誘導。周りの人も「もっと右」「そこでシュート!」など、自然と助けを出し始めます。シュートが決まると大歓声!

「見えない」なら、別の「伝える」方法を考えてみる。そのコミュニケーションを通し、みんなで助け合うことで、ひとりでは得られない大きな喜びを実感しました。

ゲームで楽しくコミュニケーション

先生：NPO法人信州アウトドアプロジェクト
吉田理史さん



吉田さんは、子どもたちが仲良くなる楽しいゲームを実践している方ですが、この日は「大人」の皆さんが挑戦しました。その一つを紹介합니다。

参加者全員がひとつの円になります。最初にテニスボールぐらいの大きさのカラーボールを1個ずつ5人が持ち、吉田さんの「せーの」の言葉とともに、ボールを誰かに投げます。このときに必要なのが、コミュニケーションの力。「あなたに投げるよ」と言うサインをどのように伝えるかです。ボールを持つ人がうまくサインを送ることで相手の人もキャッチが

できるのです。ボールの数を増やしながらかみゲームは進み、最終的には、メンバーの半分の人がボールを持って、投げます。このときには、誰が誰に投げるのか、投げたボールが空中でぶつかったりと、大変な騒ぎに。成功させるためにみんなで考えることが必要になっていきます。喧々囂々、熱くなってわれを忘れて意見を交わす先生方に対して、周りでジーンと聞いていた高校生がナイスアイデアを出す場面も。行き交うボールは、まるで人の心のように。伝え合うことの難しさや、大切さが垣間見えたのでした。

体験された皆さん、「ゲームの中で自然にいろんな人と関わることができた。やってみてわかることがたくさんあった。」「思ったよりも面白かった」「早速学校でやってみます」など、先生方自身も体験することの良さを実感されていました。



地域とつながる第一歩!

まずはお近くの社会福祉協議会・ボランティアセンターへご相談ください。



市町村	名称	電話	市町村	名称	電話	市町村	名称	電話
長野市	長野市ボランティアセンター	026-227-3707	小海町	小海町社会福祉協議会	0267-92-4107	喬木村	喬木村社会福祉協議会	0265-33-4567
松本市	松本市ボランティアセンター	0263-25-7311	佐久穂町	佐久穂町ボランティアまちづくりセンター	0267-86-4273	豊丘村	豊丘村ボランティアセンター	0265-35-3327
上田市	上田ボランティア地域活動センター	0268-25-2629	川上村	川上村社会福祉協議会	0267-97-3522	大鹿村	大鹿村社会福祉協議会	0265-39-2865
上田市	丸子ボランティア地域活動センター	0268-43-2566	南牧村	南牧村ボランティアセンター	0267-96-2363	上松町	上松町社会福祉協議会	0264-52-3560
上田市	真田ボランティア地域活動センター	0268-72-2998	南相木村	南相木村社会福祉協議会	0267-78-1001	南木曾町	南木曾町ボランティアセンター	0573-75-5516
上田市	武石ボランティア地域活動センター	0268-85-2466	北相木村	北相木村社会福祉協議会	0267-77-2111	木曾町	木曾町社会福祉協議会	0264-26-1116
岡谷市	岡谷市ボランティアセンター	0266-24-2121	軽井沢町	軽井沢町社会福祉協議会ボランティアセンター	0267-45-8113	木祖村	木祖村ボランティアセンター	0264-36-3441
飯田市	飯田市ボランティアセンター	0265-53-3182	御代田町	御代田町ボランティアセンター	0267-32-1100	王滝村	王滝村社会福祉協議会	0264-48-2008
諏訪市	諏訪市ボランティア・市民活動センター	0266-54-7715	立科町	立科町町民活動センター	0267-56-1825	大桑村	大桑村ボランティアセンター	0264-55-3755
須坂市	須坂市福祉ボランティアセンター	026-245-1619	長和町	長和町社会福祉協議会	0268-88-3069	麻績村	麻績村社会福祉協議会	0263-67-3099
小諸市	小諸市ボランティアセンター	0267-26-0315	青木村	青木村社会福祉協議会	0268-49-2129	生坂村	生坂村福祉ボランティアセンター	0263-69-1122
伊那市	伊那市ボランティア・地域活動応援センター	0265-73-2541	下諏訪町	下諏訪町ボランティアセンター	0266-27-8886	山形村	山形村ボランティアセンター	0263-97-2102
駒ヶ根市	駒ヶ根市社会福祉協議会	0265-81-5900	富士見町	富士見町ボランティアセンター	0266-78-8986	朝日村	朝日村社会福祉協議会	0263-99-2340
中野市	中野市社会福祉協議会	0269-26-3111	原村	原村社会福祉協議会	0266-79-7228	筑北村	筑北村ボランティアセンター	0263-66-2506
大町市	大町市ボランティアセンター	0261-22-1501	辰野町	辰野町ボランティアセンター	0266-41-5558	池田町	池田町ボランティアセンター	0261-62-9544
飯山市	飯山市民活動支援センター	0269-62-2840	箕輪町	みのわふれ愛センター(箕輪町ボランティアセンター)	0265-70-1061	松川村	松川村ボランティアセンター	0261-62-9000
茅野市	茅野市ボランティア・市民活動センター	0266-73-4431	飯島町	飯島町ボランティアセンター	0265-86-5511	白馬村	白馬村ボランティアセンター	0261-72-7230
塩尻市	地域福祉・ボランティアセンター	0263-52-2795	南箕輪村	南箕輪村ボランティアセンター	0265-76-5522	小谷村	小谷村ボランティアセンター	0261-82-2430
佐久市	佐久市ボランティアセンター	0267-64-2426	中川村	中川村ボランティアセンター	0265-88-3552	坂城町	坂城町ボランティアセンター	0268-82-2551
佐久市	佐久地域ボランティアセンター	0267-67-2463	宮田村	宮田村ボランティアセンター	0265-85-5010	小布施町	小布施町ボランティアセンター	026-242-6665
佐久市	白田地域ボランティアセンター	0267-82-4332	松川町	松川町地域ボランティアセンター	0265-36-3778	高山村	高山村社会福祉協議会ボランティアセンター	026-242-1220
佐久市	浅科地域ボランティアセンター	0267-58-0383	高森町	高森町ボランティアセンター	0265-34-3001	信濃町	信濃町ボランティア・まちづくりセンター	026-255-5926
佐久市	望月地域ボランティアセンター	0267-51-1520	阿南町	阿南町ボランティアセンター	0260-22-3151	飯綱町	飯綱町ボランティアセンター	026-253-1001
千曲市	千曲市ボランティアセンター	026-276-2687	阿智村	阿智村社会福祉協議会ボランティアセンター	0265-45-1234	小川村	小川村社会福祉協議会	026-269-2255
東御市	東御市社会福祉協議会ボランティアセンター	0268-62-4455	平谷村	平谷村社会福祉協議会	0265-48-2220	山ノ内町	つつみ住民活動センター	0269-33-2810
安曇野市	安曇野市社会福祉協議会ボランティアセンター	0263-72-1871	根羽村	根羽村社会福祉協議会	0265-49-2288	木島平村	木島平村ボランティアセンター	0269-82-4888
安曇野市	安曇野市ボランティアセンター 明科支所	0263-62-2429	下條村	下條村社会福祉協議会	0260-27-2858	野沢温泉村	野沢温泉村社会福祉協議会	0269-85-4347
安曇野市	安曇野市ボランティアセンター 堀金支所	0263-73-5288	売木村	売木村社会福祉協議会	0260-28-2004	栄村	栄村社会福祉協議会	0269-87-3020
安曇野市	安曇野市ボランティアセンター 穂高支所	0263-82-2940	天龍村	天龍村社会福祉協議会	0260-32-2277	長野県	長野県社会福祉協議会	026-226-1882
安曇野市	安曇野市ボランティアセンター 三郷支所	0263-77-8080	泰阜村	泰阜村社会福祉協議会	0260-26-2162			

発行日：平成25年3月31日

発行：社会福祉法人 長野県社会福祉協議会 総務企画部 地域福祉推進グループ

〒380-0928 長野市若里7-1-7 TEL.026-226-1882 FAX.026-228-0130

E-mail vcenter@nsyakyo.or.jp URL http://www.nsyakyo.or.jp/